

教育部人文社会科学研究基金一般项目成果

(06JA740017)

中国日语学习者 偏误分析

(新版)

王忻 著

外语教学与研究出版社

教育部人文社会科学研究基金一般项目成果
(06JA740017)

中国日语学习者偏误分析 (新版)

中国人日本語学習者に見られる誤用の研究
— 日中言語対照の視点から —

王忻 著

外语教学与研究出版社
北京

图书在版编目(CIP)数据

中国日语学习者偏误分析(新版)/王忻著. — 北京:外语教学与研究出版社, 2008.11

ISBN 978-7-5600-5966-2

I. 中… II. 王… III. 日语—自学参考资料 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2006) 第 095618 号

出版人: 于春迟

责任编辑: 田秀娟

封面设计: 刘冬

版式设计: 李萌

出版发行: 外语教学与研究出版社

社址: 北京市西三环北路 19 号 (100089)

网址: <http://www.fltrp.com>

印刷: 中国农业出版社印刷厂

开本: 889×1194 1/32

印张: 15.25

版次: 2008 年 11 月第 2 版 2008 年 11 月第 1 次印刷

书号: ISBN 978-7-5600-5966-2

定价: 27.90 元

* * *

如有印刷、装订质量问题出版社负责调换

制售盗版必究 举报查实奖励

版权保护办公室举报电话: (010)88817519

物料号: 159660101

写在前面

自从开始学日语的那天起，就一直对如何不出错耿耿于怀。说一口、写一手没有错误的地道的日语可能是包括我在内的许许多多日语学习者的愿望吧。回头看去，从80年代后期学写文章时起，所写题目多多少少都与偏误有关，如1987年发表在《日语学习》上的《同表场所的助词“に”与“で”》、1988年发表在《日语知识》上的《“お”“ご”附加规则浅探》、1988年发表在《日语学习与研究》上的“恥ずかしい”等词的辨析等涂鸦之作，就已显示出这一倾向。后来虽然研究层次不断加深，但只要有可能，都会力求与近义表达辨析及使用上的禁忌牵上瓜葛。由此可见本人对偏误研究的一往情深。2000年前后，随着对二语习得理论的接触，觉得系统地对日语学习中的偏误进行研究或许很有意思，于是开始着手收集实际发生的误用例。起初是自己在学生作业中收集，有一个记一个，记的多了再筛选；后来又拜托日本外教及同行帮忙。其中前上海理工大学外教前田真奈美是给我提供误用例最多的友人，浙江工业大学副教授、日研中心的同窗夏菊芬也给我提供了许多例句。杭州师范学院同事田苗、洪优在对误用例进行整理编排的工作中给予了大力帮助。一边收集新的，一边对到手的进行分析研究，在那几年是自己的重要工作之一。

2004—2006年第二次赴恩师、千叶大学教授松本泰丈门下学习（第一次是1994、1995年，当时恩师在山梨大学任教授），这次的主要任务是在导师的指导下围绕中国日语学习者的偏误进行研究，并以此为题攻读博士学位。在此期间，老师除在学术理论、研究方法等方

面给予大力指导外，还格外给与了许多支持。如老师亲自在某中国出版物上搜索误用例，然后用近一学期的时间在上课时进行分析；另外还将近一学期时间的周一下午的日本语学课的时间交给我使用，具体地说就是在该时间里由我给日本学生上课，当然与其说是上课不如说是将我收集的误用例句交给日本学生讨论，并确认修正方案。老师还指示博士生下地贺代子，本科生丸山义正、日越翔太三人用近两个月的时间对全部 2000 多个误用例的修正方案进行了订正。此外，除在老师课上正常的“发表”外，还让我到“月末の金曜”研究会（东京大学）上去“发表”，以求得到更广泛的指导和评论。其前期、中期成果分别在千叶大学研究生院社会文化科学研究科（博士阶段）研究计划报告书第 123 辑《語彙と文法の相関》（松本泰丈编 2005 年 3 月）、《对照言語学研究》第 15 号（2005 年 12 月）及《国文学解釈と鑑賞》2006 年 7 月号上的刊登，也都是与恩师的教诲、指导和关照分不开的。

在语言调查和实验中，除得到千叶大学师生的大力协助外，还通过电子邮件得到杭州师范学院外教佐藤由佳和浙江樱花外语学校首席教师盛惠子等人的大力帮助。挚友、早稻田大学博士生、浙江樱花外语学校主任教师松浦友子对本研究提出过许多很有见地的意见和建议，还对论文的大部分章节做了日文审核。可以说本书也凝结着她的汗水和心血。

同为导师学生的下地贺代子（晚我一个学期提交论文，现已获得博士学位）除前述协助订正误用例的修正方案外，还经常与我交流论文写作心得，在我“发表”时提出了许多宝贵意见与建议，使我受益匪浅。

在校内外的各种“发表”之际，许多老师和同学都提出很多宝贵

意见和建议，特别值得一提的几位是千叶大学金田章宏教授、东京大学铃木泰教授和大东文化大学高桥弥守彦教授。同期在千叶大学学习研究的烟台大学毛峰林教授也提出了许多宝贵意见。

上述的学习研究得到日本国际交流基金日语教育特别研究员（日本語教育フェローシップ）项目和中国国家留学基金委政府派遣研究员项目的资助。这些资助对本研究的成功至关重要。

经过上述过程，本书的初稿以学位论文的形式于2005年9月向千叶大学研究生院提交，经审查、答辩等程序，获得了该校颁发的文学博士学位。审查阶段，又得到全体审查委员——千叶大学教授松本泰文、中川裕、村冈英裕、山田贤及立正大学教授冈田袈裟男等各位专家的热情指教。这些指教对后来的修改起了举足轻重的作用。

本书在出版过程中，外研社薛豹、张溥两位主任及责编田秀娟老师均付出巨大劳动，为本书的成功写下最后也是最关键的一笔。

没有上述各位的教导、帮助与支持，本书的成功是绝不可能的。在此谨向他们表示最诚挚的谢意!!!

对学习者的偏误进行分析与研究，无论是对学习者还是对教育者、研究者来说，也无论是从理论意义上还是从应用意义上来讲，都是一个值得长期做下去的课题。本书所做的还仅仅是一小步尝试而已。因本人水平有限和时间仓促，终难免挂一漏万，还望各位专家、同行不吝赐教。如此拙作能对我国日语学习与教育、日语语言学研究发挥稍许作用，便足以令笔者欣慰了。

著者

2006年9月于杭州钱塘江畔

本書の公刊にあたって

この本は他言語を習得しようとするさいにあらわれる誤用、具体的には中国人の日本語学習者にみられる誤用について分析し、考察したものである。とりあげる領域は、語彙・文法の諸側面にわたる。あつかう誤用はすべて実例にもとづいている。また、誤用例の解説に必要な正用例も、日本語の文学作品などからあつめられた実例である。

誤用例のさしだしかたは辞書的に羅列するのではなく、言語体系にそってすすめていこうとしている。語彙編からはじまって文法編へとすすみ、文法編のなかは名詞・動詞・形容詞など品詞別の分析から出発している。この構成をふまえてよんでもらうことがのぞまれているのだろうが、ページをめくってどこからよみだしても、興味ぶかい誤用の実例とその分析につきあたるはずである。

この本での誤用の分析は、うえにみる構成からもよみとれるように、個々の誤用例をきりはなしてあつかうのではなく、日本語、中国語それぞれの言語体系のディテールが現象化したものととらえる観点からおこなわれる。誤用をうみだした中国語がわの事情、それを誤用とする日本語がわの事情、つまり日中両言語の体系のちがいが問題になるとき、分析は対照研究的ないろあいをおびてくる。副題「日中言語対照の視点から」はそこからつけられたものだろう。この本の誤用研究は、日本語教育の実践の面で役だつばかりでなく、日中両言語の対照という研究の面でもおおいに貢献することが

期待できる。

この本は、もともと著者王忻さんが 2005 年度千葉大学から博士の学位をうけた学位論文である。論文審査をつとめたものとして松本は、その論文が公刊されておおくの読者の目にふれる機会をえたことをよろこび、推薦のきもちの一端をかかせていただく。

王忻さん、おめでとうございます。

(2006年9月3日 日本別府大学にて まつもと ひろたけ)

4.2	慣用句	69
4.2.1	通りがいい	70
4.2.2	気に入れる	71
4.2.3	業になる	73
4.2.4	雀の涙	75
4.2.5	手にかける	76
4.2.6	鼻に付く	78
4.2.7	背骨を折る	81
4.2.8	鼻をかく	83
4.2.9	夢を失く	86
4.2.10	結び	87
5	語の表記	88
6	品詞	97

目次

第一部 序論 誤用の概説.....	1
1 はじめに.....	3
1.1 誤用研究の意義.....	3
1.2 誤用の定義.....	4
1.3 誤用の分類.....	5
2 先行研究について.....	6
2.1 誤用研究の概観.....	6
2.2 誤用研究の分類.....	9
2.2.1 研究分野からの分類.....	9
2.2.2 研究方法からの分類.....	11
2.3 日本語の誤用研究.....	12
2.3.1 日本国内における研究.....	12
2.3.2 中国における研究.....	16
2.4 先行成果の問題点.....	20
3 本研究について.....	22
3.1 本研究の意義と位置づけ.....	22
3.2 研究方法と資料について.....	24
3.3 構成.....	27

第二部 誤用の分析 (一) 語彙編 29

4 語の選択 31

4.1 単語 31

4.1.1 日本語にない語彙と中日同形異義語 31

4.1.2 間違えやすい名詞の誤用 44

4.1.3 間違えやすい動詞の誤用 50

4.1.4 中国語の「过」と日本語の「過ぎる」 61

4.2 慣用句 69

4.2.1 通りがいい 70

4.2.2 気に入れる 71

4.2.3 薬になる 73

4.2.4 雀の涙 75

4.2.5 手にかける 76

4.2.6 鼻に付く 78

4.2.7 世話をかける 81

4.2.8 謎をかける 83

4.2.9 事を欠く 86

4.2.10 結び 87

5 語の表記 88

第三部 誤用の分析 (二) 文法編 95

6 品詞 97

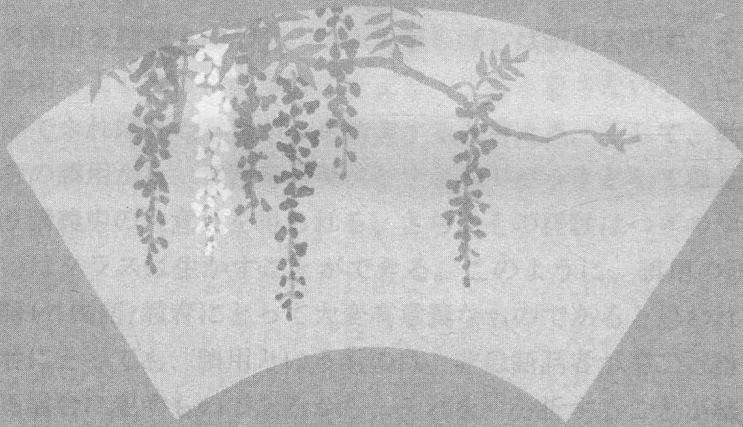
6.1	動詞と名詞の間の混同.....	97
6.2	イ形容詞とナ形容詞の間の混同.....	100
6.3	ある文脈での品詞誤用.....	100
7	名詞	102
7.1	形式名詞.....	102
	「の中」の過剰使用.....	102
7.2	代名詞.....	112
8	動詞	117
8.1	テンス・アスペクト.....	117
8.1.1	前過去を過去と間違える誤用.....	117
8.1.2	従属節の中のテンス.....	121
8.2	ヴォイス.....	126
8.2.1	過剰.....	126
8.2.2	不足.....	132
8.2.3	文の部分の間の関係が混乱する.....	138
8.2.4	態の混同.....	139
8.3	可能動詞.....	141
8.4	自動詞・他動詞.....	148
8.4.1	自動詞構文と他動詞構文.....	148
8.4.2	慣用句における自他動詞の性格について.....	154
9	形容詞	158
10	副詞	161

10.1	下位分類の分布	161
10.2	中国語からの干渉によると言えそうな誤用	162
10.3	発音が似ていることからの誤用	168
11	助詞	171
11.1	格助詞	171
11.2	取り立て助詞	178
11.3	「は」と「が」	181
12	指示詞	188
12.1	空間的な語を使っても文脈指示の用法に従がわなければならないもの	188
12.2	「そ」系を「あ」系にしたもの	190
12.3	「こ」系を「そ」系にしたもの	192
13	接続	197
13.1	接続助詞で(で)、ので、から	197
13.2	接続詞「そして」などについて	201
13.3	他の接続の問題	206
14	文型	212
	それにしても・それにしては	212
15	敬讓語	221
15.1	使用不足	222
15.2	使用過剰	223

15.3	混乱	224
16	モダリティ	227
16.1	「しましようか」について	227
16.2	「だろう」について	228
16.3	「はず」について	230
16.4	伝聞の「そうだ」について	232
16.5	「ようだ」について	233
17	文体	234
17.1	文末の文体	235
17.2	節末の文体	235
17.3	引用節の中の文体	238
第四部 結び 誤用の体系		241
18	分布から見た体系	243
18.1	日本語のカテゴリ一表で見た分布	244
18.2	言語記述の体系と誤用の体系	
	一分類する作業について	249
19	間違えやすい特徴から見た体系	253
19.1	語彙	253
19.2	文法	256
20	原因から見た体系	262

20.1	中国人の誤用における言語間エラー.....	263
20.2	日本語の言語内エラー.....	265
20.2.1	中国人の母語干渉によるものでない誤用.....	266
20.2.2	複数の外国語母語話者が共通して犯す誤用.....	268
20.2.3	母語干渉によるものと複数の外国語母語話者が 共通して犯す誤用が重なるケース.....	272
21	終りに.....	273
	参考文献.....	275
	引用例文出典一覧.....	286
付録	誤用例集（王忻、前田真奈美、夏菊芬 編）..	291

第一部



序論 誤用の概説

